

2021年2月27日（土）～3月21日（日）開催

六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクト

オンラインプログラム『六本木アートナイト・デジタル“RAN TV”』

先行きの不透明ないまだからこそ、アートにできる何かがある

六本木アートナイト実行委員会 実行委員長よりご挨拶



六本木アートナイトは、六本木の街を舞台としたアートの祭典。美術館をはじめとする文化施設、大型複合施設、商店街が集積する六本木の街全域にわたり、アート展示、音楽やパフォーマンス、トークなどの多様なコンテンツを展開し、社会に於けるアートの更なる可能性を発信してゆくフェスティバルで2009年より継続的に開催しています。

新型コロナウイルス感染症により2020年5月に予定していた「六本木アートナイト2020」は取り止めとなり、アートの灯を絶やさないためにも、2020年度内に六本木アートナイトスピンオフ・プロジェクトを開催することにいたしました。

六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクトでは、六本木アートナイトの新コンテンツとして、ご自宅でも、おでかけ先でも楽しめるデジタルコンテンツ「六本木アートナイト・デジタル“RAN TV”」が始動します。

「RAN TV」では、アート対談やパフォーマンス作品の配信を行うほか、今回、初めての実施となった映像作品のみのオープンコール・プロジェクトの採択作品などをお送りいたします。「六本木アートナイト・デジタル“RAN TV”」は、今回だけでなく、今後も継続的に取組を発展させる予定です。

コロナ禍で減少したアートと人との接触機会を取り戻し、アーティストとアートを盛り上げていく契機にしています。六本木アートナイトの今後に向けたプロジェクトとしてもどうぞ注目ください。

六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクト 開催に向けて

先行きの不透明ないまだからこそ、アートにできる何かがある

パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症により、2020年は世界各地の芸術文化活動が延期や休止を余儀なくされました。2009年から10回開催されてきた「六本木アートナイト」も例外ではありません。この間、美術、演劇、音楽、映画など多様な芸術文化業界は、感染防止対策をそれぞれの業態に合わせて講じながら、いかに芸術活動を絶やさず、表現者と観客をつなぎ続けられるのか、さまざまな方法を模索し、試行錯誤を続けてきました。

「六本木アートナイト実行委員会」でも、2020年5月に予定していた「六本木アートナイト2020」の取止めを受け、その後の対応について検討してきました。この状況において芸術活動を継続するため、そして、六本木の街に回復のエネルギーをもたらすため、いま何ができるのか。「先行きの不透明ないまだからこそ、アートにできる何かがある」。そう信じて考えた「六本木アートナイト」のチャレンジは、「六本木アートナイト・スピンオフ」としてのデジタル領域での展開です。

コロナ禍で飛躍的に拡大したデジタル領域におけるアートの表現。ウェビナーなどのオンライン・トークイベント、オンラインの映像展示、「六本木アートナイト・アーカイヴ」など、多様なコンテンツを会期中に展開。コロナ禍、あるいはコロナ以降のアートフェスティバルの存在意義、そしてこれからの「六本木アートナイト」の可能性についても、共に考えるプラットフォームになれば嬉しく思います。

「六本木アートナイト・スピンオフ」で試みるデジタル・プログラムは、未だ完全な終息時期の見えない新型コロナウイルス感染症に対し、「六本木アートナイト2021」開催時にも適用される可能性があり、そのための実証実験とも捉えています。また「六本木アートナイト」は六本木というリアルな「街」をベースとしてきましたが、コロナ終息以降にもデジタル領域という無限の新しい「場」を引き続き開拓し、リアルとデジタルのハイブリッドで展開していきたいと考えています。

六本木アートナイト実行委員長
片岡 真実（森美術館 館長）



撮影：伊藤彰紀

RANはRoppongi Art Nightの頭文字。

RAN TVは今回の六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクトより開始する新コンテンツです。映像作品やアーティストトークの配信、過去の記録映像などの配信を行います。今回初めて、映像作品のみのオープンコール・プロジェクトを実施し、30作品が採択されました。

RAN TVは今回だけでなく、今後も継続的に取組を発展させる予定です。

映像プログラムの配信はすべて <https://www.youtube.com/channel/UCFiRs1izR5RlpKlBcdqD43w> にて行います。※すべて視聴無料

● トーク：六本木アートナイトの未来像を考える【国内編】

トーク

都市型国際芸術祭のコロナ禍でのチャレンジとは？

国内各地で開催される国際芸術祭は、都市空間を中心的な会場とするものと、里山や山村などを会場とするものに大きく分けられます。周囲の自然環境や風景と融合した芸術体験が特徴となる後者に対し、都市型の国際芸術祭に求められるのは何か？誰に向けて発信されているのか？そして、コロナ禍による行動規制によって、国際芸術祭にはどのような変化が求められているのか？本ディスカッションでは、横浜、埼玉、東京でそれぞれ国際展に関わった、あるいは関わっているディレクターとともに、都市型国際芸術祭の未来像について語ります。



左上：片岡 真実 (Photo by Ito Akinori)
左下：中村 政人
右上：遠山 昇司
右下：帆足 亜紀

- ・参加者：帆足 亜紀 (横浜トリエンナーレ組織委員会事務局次長、プロジェクト・マネージャー)、遠山 昇司 (「さいたま国際芸術祭 2020」ディレクター)、中村 政人 (「東京ビエンナーレ 2020/2021」総合ディレクター)
- ・配信日：3月18日(木) 19:00～21:00 ※以降はアーカイブ配信

● トーク：六本木アートナイトの未来像を考える【アジア太平洋編】

トーク

国際芸術祭の新しいかたちはあるのか？

2020年に開催予定だった国際芸術祭が世界各地で延期・中止され、2021年後半以降にはそのいくつかが開催予定です。この間、各国国際展では新しいリサーチや制作・展示、運営の方法を模索してきました。その経験によって各国国際展主催者は、その存在意義、誰のためになぜやっているのか、という根源的な問いに對峙することとなりました。本ディスカッションでは、アジア太平洋地域で2021年に開催が予定されている光州市 (韓国)、プリスベン (豪州)、コチ=ムジリス (インド) の各国国際展の代表者あるいはキュレーターを招聘し、何を変革し、何を守るのか、芸術祭の新しいかたちはあるのか、といったビジョンについて語ります。



左上：片岡 真実 (Photo by Ito Akinori)
左下：シュビギ・ラオ (Photo by Samir Sahay)
右上：ルーベン・キーハン (Photo by Joe Ruckli)
右下：キム・ソンジョン (Photo by choi.ok.soo.)

- ・参加者：キム・ソンジョン (光州ビエンナーレ財団理事長)、ルーベン・キーハン (第10回現代美術アジア・パシフィック・トリエンナーレ企画チーム)、シュビギ・ラオ (第5回コチ=ムジリス・ビエンナーレ、キュレーター)
- ・配信日：3月19日(金) 18:30～20:30 ※以降はアーカイブ配信

● トーク：六本木アートナイトは何を目指して創ってきたのか？

トーク

2003年に六本木ヒルズ、2007年に国立新美術館と東京ミッドタウンが誕生し、街の機能や性格が変化しつつあった2009年、六本木アートナイトは誕生しました。たった二日、しかも日没から夜明けの時間帯がコアタイムというスタイルは日本における地域アートフェスティバルの中でも一際異彩を放っています。夜というシアトリカルな時間にインスタレーションが見慣れた都市風景を一変させ、動的なイベントが人々にアドレナリンの放出を促す—その絶妙なブレンドこそが、このフェスティバルをここまで成長させたのかもしれない。コロナ禍の中での変貌を模索するためにも、このフェスティバルがどのような意志で始まり何を目指してきたのかを検証します。



第一回「六本木アートナイト2009」
体長7.2m!!六本木ヒルズアリーナに出現したヤノベケンジによる
機械彫刻『ジャイアント・トラヤン』

- ・参加者：逢坂 恵理子 (国立新美術館長)、今村 有策 (東京藝術大学教授)、日比野 克彦 (東京藝術大学教授)、臼井 浩之 (六本木商店街振興組合理事長)、進行/武村 俊 (六本木アートナイト プログラム企画)
- ・配信日：3月中旬予定

メッセージ映像

● メッセージ映像「いま、アートで街を元気にできる？」

六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクトは、当初「いま、アートで街を元気にできる？」を掲げてリアルイベント (作品展示やインスタレーションに伴うパフォーマンスライブ配信) も企画していましたが、最終的にデジタルプログラムのみになりました。このメッセージ映像は、「いま、アートで街を元気にできる？」をテーマとして、六本木の街の人たちや六本木アートナイト関係者とともに制作いたしました。



● 吉岡 徳仁《ガラスの茶室 - 光庵》

国立新美術館正面入口前で特別公開されている《ガラスの茶室 - 光庵》がコバルトブルーにライトアップされる光景を吉岡徳仁のインタビューとともに配信します。その青く輝く光には、新型コロナウイルスと戦う医療従事者への感謝のメッセージが込められています。

《ガラスの茶室 - 光庵》は、空間と時間の概念を超えた、日本文化の根源を再考する作品です。この光の建築は、日中は降り注ぐ太陽の光により水面のような輝きを生み出し、クリスタルプリズムの彫刻から放たれる光は虹となり「光の花」が現れます。

・配信日：3月上旬予定

※コバルトブルーのライトアップは本配信のみでご覧いただけます。



《ガラスの茶室 - 光庵》コバルトブルーのライトアップ
2021年 国立新美術館 (六本木アートナイト・スピンオフ・プロジェクトでの展示イメージ)

● 東京都交響楽団 + ムラバヤシケンジ

サラダ音楽祭 on RAN TV「クラシック編」「ジャズ編」

誰もが音楽の楽しさを体感・表現できる音楽祭「サラダ音楽祭」と六本木アートナイトのコラボレーション企画。この度、六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクトのデジタルプログラムとして、東京都交響楽団の弦楽四重奏と打楽器による音楽世界にチャームな立体作品が魅力のムラバヤシケンジが加わり、「クラシック編」「ジャズ編」のふたつのミニコンサートを再構築します。※この企画は「六本木アートナイト2020」のリアルイベントとして開催する予定でした。

オリジナル映像



- ・ 出演者：ヴァイオリン／塩田 脩 SHIODA Shu
ヴァイオリン／山本 翔平 YAMAMOTO Shohei
ヴィオラ／萩谷 金太郎 HAGIYA Kintaro
チェロ／江口 心一 EGUCHI Shin-ichi
パーカッション／安藤 芳広 ANDO Yoshihiro

- ・ 美術：ムラバヤシケンジ
- ・ 配信日：3月下旬予定



● 六本木アートナイト・アーカイブシリーズ

カンパニー・デ・キダム 《FierS a Cheval〜誇り高き馬〜》

「六本木アートナイト2016」に招聘した、フランスのスペクタクル・パフォーマンス・グループ、カンパニー・デ・キダムによる、巨大な光る馬が繰り広げる幻想的なパフォーマンス。夢の中に登場したような不思議なキャラクター達はやがて巨大な光る馬に変身し、幻想的なパレードが繰り広げられます。

アーカイブ映像



● 六本木アートナイト・アーカイブシリーズ

オレカTX2019 《巨人のオモチャの音楽会》

「六本木アートナイト2019」で招聘したスペイン・バスク地方を本拠地とするユニークな音楽グループ「オレカTX」の圧倒的なステージ。バスク地方に伝わる伝統的な打楽器チャラルタによる音楽は高い音楽性を有していますが、それだけではなく巨大な人間（実は人形）に操られている音楽家の人形（実は人間）という視覚的な仕掛けが更にこのパフォーマンスに魅力を付け加えています。共演するフープダンサーAYUMIのチャームな動きもこの演目の価値を更に高めています。

アーカイブ映像



オープンコール・プロジェクト採択作品

六本木アートナイト2015より開始した参加作品の公募を行う「オープンコール・プロジェクト」。

今回は、初の映像作品のみを募集しました。国内外から約200作品の応募があり30作品を採択しました。アート、音楽、ダンス、パフォーマンス、ストーリーがある内容やコミカルな作品など多彩。街を、人々を、元気にしてくれるでしょう。採択作品の内、5作品は、六本木アートナイト・デジタル“RAN TV”を広く普及させるために同時募集したムービングタイトル作品です。

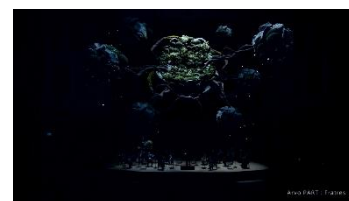
2月27日（土）より、「六本木アートナイト・デジタル“RAN TV（ラン・ティーヴィー）”」

<https://www.youtube.com/channel/UCFiRs1izR5RlpKIBcdqD43w> にて一挙公開いたします。

● 落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクト

《「双生する音楽会」》

2020年10月13日、ウィズコロナでの新たな「音楽会」がリアルと配信の世界で「双生」した。コンサート会場での音楽鑑賞は生の音楽の身体性と祝祭性がテーマ。「密を避ける」という今の状況は、演奏会のスタイルの変容を私たち迫りました。《双生する音楽会》では、リアルとオンラインによる2つの全く異なるコンサートを提示。オンライン観賞を劇場観賞の単なる代替手段とせず、オンラインにしかできない新しい鑑賞体験を創り上げました。



フラトレス (アルヴォ・ベルト作曲)

● コメカミワークス

《さえぎりさん》

パフォーマンスする男を様々な方法でさえぎってしまう「さえぎりさん」。この作品は他人からすると、道端での興味のないパフォーマンスは通行の邪魔でしかないのかもしれない。と思ったことがきっかけとなり制作を始めました。ジャグリングを交えながら、「邪魔」をテーマに他人の立場や思いをコミカルにキャラクター化したゆかいな動画です。



KOMEKAMI WORKS

● まちだりな

《Yawaraka boat》

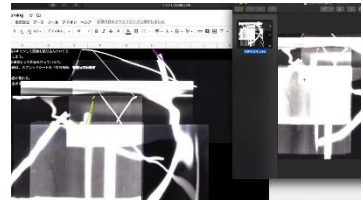
絵具により描かれた、膨大な原画から構成される4分間の短編アニメーションです。「浴室」をモチーフとして「生活すること」をイメージ的に描いています。浴室の湿度は、内と外が曖昧になった世界から私たちを包み隠し、解放感へと導きます。独特なやわらかさとユーモアで、観る人の肩の力が抜けていく長い長いため息のような作品です。



Yawaraka boat_PAN

● losles
《Live Scan Archive》

「Live Scan Archive」は、loslesが行った2020年4月にGoogleスプレッドシート上で行ったライブ配信イベント「Live Scan Streaming」のアーカイブ映像です。Live Scanは「かく」担当の下村奈那と「とる」担当の瀬尾憲司の二つの役割によって行われます。下村がかいた線を、瀬尾がA4スキャナーでスキャンし等倍で重ねることで作られます。かかれた線、その線をスキャンしたもの、スキャン画像の上にかかれた線、それをスキャンしたもの、と幾層にも重ねられ、オリジナルと複製の境界の曖昧なイメージが作られています。



● asamicro
《珈琲跳》

珈琲の中毒性と、表現に対する意地をテーマにダンサーasamicroを筆頭にトラックメーカー、カメラマン、ヘアメイクの4人で制作しました。楽曲担当の田中タリラは実際に珈琲を淹れる音から録音し楽曲制作しています。暮らしの違和感を明日への期待に残し踊っています。



Coffee dance/asamicro

● 吉崎 裕哉
《Dansprint to you》

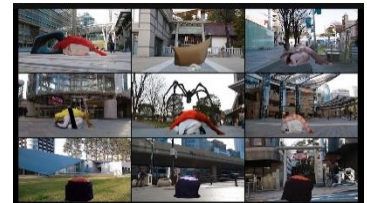
舞踊家・振付家の吉崎裕哉が、新型コロナウイルス感染拡大により先の見えない時代に向けて作った“希望”がテーマの舞踊作品。「Dance(踊り)」と「Sprint(かけっくら)」を組み合わせた造語「Dansprint」がテーマです。タイトルの「Dansprint to you」とは「踊りかけっくらし、あなたに会いにゆく」という意味があります。ヲノサトルによる楽しく美しい音楽と薄田真美子、吉崎裕哉の解放感溢れる踊りをお楽しみください。



Jin Itai

● 平本 瑞季
《リモート寿司パフォーマンス 2021》

ピーッ！六本木の街から聞こえる笛の合図で、画面上に「寿司」たちが集まってくる！？zoomを使い、それぞれの家からリアルタイムでパフォーマンスに参加してもらいました。リモートでパフォーマンスを行うことで、コロナ禍で人々が触れ合う・集うことが難しい状況下での、新しい「寿司パフォーマンス」の形を提示します。背景に、「今」の六本木の風景や、生活空間である「部屋」を用いることで、緊急事態宣言下の街の様子や、人々の暮らしもパフォーマンスの一部として記録する試みです。



Socially Distanced Sushi Performance 2021

● 小池 博史
《バラタ》

新型コロナウイルスの影響で世界的に舞台公演が制限されるなか、小池博史ブリッジプロジェクトも8年計画で取り組んできた舞台「完全版マハーバラタ」が2021年8月に延期となり、その他の舞台も中止、延期を余儀なくされました。このような状況の中、新たな方法への挑戦として、マハーバラタからインスピレーションを受けた5分のマハーバラタ写真映画を制作し、コロナ禍で「異」なるものに対して不寛容になりつつある社会に、芸術と古典を通じた寛容の重要性を示し、共生社会の必要性を訴えようと試みました。



Hiroshi Koike

● すみふで
《東京だんご》

団子(だんご)に都市の建築を写し取るプロジェクトです。稲作文化が豊かな日本において、古来より儀式や祭との関わりが深い、米(コメ)。この米を原料とする郷土食は各地域に存在し、その土地の風土をよくあらわしています。このような米を原料とし、郷土性のある食媒体の団子(だんご)に、都市の風景となっている建築を写し取り、東京における文化的な郷土風景を考察しました。



SUMIFUDE

● 渡邊 高章
《楽園の船》

本作は、現在人々を苦しめているコロナ禍の中で生まれました。この未曾有の事態において、そうなっは欲しくない未来がここにあります。撮影は、最低限の人数(俳優とカメラのみ)で行う為に全編グリーンバックで行いました。これにより、感染防止を含め、効率的な撮影を行うことができました。コロナが無ければ生まれなかった作品ですが、私にとっては自分の為に作らなければならなかった作品でした。今は大変な状況ですが、私たちの物語は続いていきます。より良い未来を迎えるために、今の自分に出来ることをしようと思います。



『楽園の船』シーン画像

● 岡田 希淳
《Gray》

日本、ヨーロッパを中心に活動するコレオグラファー・ダンサー 岡田希淳(おかだねね)が、コロナ禍の中で生まれた様々な思いを人々と繋ぐダンス映像作品です。文字だけでは表現しきれない感情、エネルギーを“踊り”というアート表現でお楽しみください。



Gray/ Nene Okada

● 村口 知巳

《木星日常》

映画監督・脚本家の村口知巳（『美しいロジック』、『ナナサン』）が初めて企画プロデュース・脚本を担当し、監督に新進気鋭の宮原拓也（『sweep.』、『ルーティン』）、撮影にビデオグラファーの村上岳を迎え、リリカルでスタイリッシュな短編映画を制作。キャストには今注目の若手俳優、笠松七海と本庄司を起用し、日常と非日常のアンニュイな交わりと愛の行方の物語を描きました。



Title of A Jupiter Day

● アガイガウガ

《「い」》

SOCIAL WORKEERZのイノベーションチーム、アガイガウガによる「い」。便利とは？ ニーズとは？ コミュニケーションとは？ 創るとは？…昨今の、便利で機械的な社会に生きながら、自分自身と向き合い、常に問い続けていく。そんなメッセージを込めたビデオです。作品の表現の中にある様々なコントラストをお楽しみください。



Agaigau ver-2

● 曽根 知

《朝月 ~ Asazuki ~》

日に向かう朝月を謳った短歌に想を得て、この世界を常に新鮮に見つめて受け止め、希望を持つ繊細な感情を表現しました。「朝月の 日向黄楊柳 古りぬれど 何しか君が 見れど飽かざらむ」（万葉集、柿本人麻呂） 有明の月が、昇る太陽と向かい合うという日向産の黄楊(つげ)の柳はもう古びてしまいましたけれど、あなたのことはいつまで見つめていても見飽きることはないのです。冬の日の早朝、正に始めの撮影のために山頂に到着した私たちは、朝日に輝く月を目にし、魅了されたのです。月のイメージは私たちをこの短歌に導き、ビデオ創作を完成させました。ポストエフェクトは使用せず、手作業による映像効果のみを演出に使用しました。



Dance: Tomo Sone
Direction: Julieta Lasarte

● 加世田 剛

《ア・ピース》

初めて踊った時から、気が付けば30年あまり。いろんなダンスを身につけ、自分をより大きく魅せようと、着飾ってきました。ですが、どんなに頑張っても僕はただの「欠片」でしかないようです。でもその欠片でも誰かに少しでも力を与えることができると信じています。



● 小川 潤也

《DELIVERY BOX PROJECT 20201125》

デリバリーボックスを模したギャラリーに作品を設置し移動展示を行う「DELIVERY BOX PROJECT」は、〈移動が制限される世相における移動式ギャラリー〉と銘打ったプロジェクトです。デュシャンの「トランクの中の箱」や小沢剛の「なすび画廊」といった移動式ギャラリーの歴史を辿りつつ、コロナ禍がもたらした雇用悪化と外出自粛に裏付けされた路上の景色に擬態しながら街中を移動します。



DELIVERY BOX PROJECT

● Ne Na Lab (杉本 音音・遠藤 七海)

《ラジオ体操第1.1》

杉本音音、遠藤七海による身体を用いた実験・考察企画「Ne Na Lab」が考案する新たなラジオ体操。2020年、感染症拡大の影響で「新しい生活様式」が始まりました。前向きな言葉とは裏腹にマスクで見えない相手の表情、家に籠って出会いのない日常という閉塞感が社会に漂っています。「新しい生活様式」をもっと楽しく捉えることはできないだろうか。そこで、「新しい生活様式」=日常のアップデートと捉え、ラジオ体操第一のアップデート版『ラジオ体操第1.1』を制作しました。



● Zukinてーる

《怠惰の迷い星V》

シンガーソングライターZukinの持つ世界観を、映像クリエイターの吉田高尾が六本木の街にプロジェクションして制作しました。過去の六本木アートナイトでも使用されていた親しみやすい公園と、それと対比するような六本木の超高層ビル群。その合間を縫うように、ドロイングのアニメーションをプロジェクションすることで、六本木の街としての魅力と、そこで暮らす人々の生活を表現しました。



Zukinてーる

● なめらかカワイ音楽事務所

《road trips "MuroRunn" 2020》

サウンドクリエイター・ヴィジュアルアーティストである“LouieTokyo Louie”(なめらかカワイ音楽事務所)による映像作品。車窓からみえる「線」をテーマにし撮影された写真をつなぎあわせた、北海道から東京へ向かうロードトリップ・ムービー。



From road trips "MuroRunn" 2020

● 鈴木 奈菜

《dancing with the universe》

“dancing with the universe”が公開されました！世界はみんな繋がっている。ぜひみてみてください！ ^^ Hope you'll enjoy it!

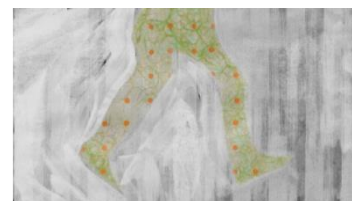


gochagocha tye

● ケイティ・ターンブル

《Limit》

手描きのビジュアルによるアニメーション作品であるこの作品はロンドンでのロックダウン期間において創られました。この作品は内宇宙を探索するものであり、地理学的かつエモーショナルな作品でもあります。また私が初めて海外で発表する作品でもあります。



varioustomatoes image

● マシュー・ケフ

《Heyday Pile》

この作品は、うっとりするようなファンファーレが鳴り響くシーンを含んだ、キャンディーに包まれた夢いっぱいの世界に存在するビデオゲームのセットです。甘ったるい図像が積み重なり、奇妙な物理学のシミュレーションが画面を埋め尽くします。



● ダンテ・ザバラ、オシアン・エフニシエン

《不思議な動物世界》

誰も想像だにできなかった独創的な映像のなかで私たちをとりまいている自然世界を覗いてみよう。



By Dante Zaballa and Osian Efnisien

● マッテオ・メッシーナ

《Matteo Messina Pawns of Furthest East (online version)》

最極東は日常のゲームのなかで裏技の特典が受けられる特別のフリーゾーン。奇妙な谷の中にあり、人間と機械の交配が開発されテストされる、立ち入りが規制されたサイバー・エリア。近い将来、人間は自らが作ったテクノロジーによる機械に支配され、その肉体は人間のアイデンティティを阻害するものになりかわっている。日常の生活は完全にゲームの世界となり、市民は人間の日々をプレイするための人質となり生きながらえている。

このストーリーは、自分の所有するアマゾンのアレクサに支配されて生活する少年メックスと、そのような現実から逃げ出すことに成功し最極東に住む少女マッドアについて話です。メックスはデータの砂漠をゆく厳しい旅に参加することになります。奇妙な谷の陰鬱な森では驚愕の出会いが待ちかまえています。



Matteo Messina, Pawns of Furthest East (onlineversion), 2019

● ニーナ・E.シェーネフェルト

《P. A. R. A. D. I. S. E.(楽園)》

P. A. R. A. D. I. S. E.は、人工的なスペースでのヴァーチャルな体験と、自然世界の中での肉体的で現実的な体験の違いについての作品です。現実が時として非現実と感じられ、ヴァーチャルな現実が益々現実のものとなりつつある今日ではありますが、やはりそこには違いが存在しています。それは真実についての問いかけです。物語はタイガーという女性と彼女の仲間コンドルの運命をめぐって展開します。二人はある技術会社がどのように人の心理を操作しているのかを調査するジャーナリスト。P. A. R. A. D. I. S. E.とは高度の感覚を体験できる新しいVRのプログラムで、人々はそれを用いて極限の体験をテストすることができます。このプログラムは議論の対象になっていませんが、利用者は不眠症を引き起こし、時として突然死に至ることがあります。



オープンコール・プロジェクト 「RAN TV」ムービングタイトル採択作品

RAN TVが六本木アートナイトのデジタル企画として広く普及するため、RAN TVの文字が含まれる映像作品を募集し、5作品が採択されました。

● 黒幕アダム 《noise》

覆面クリエイター「黒幕アダム」が六本木アートナイトのシンボルを制作。テレビにちなんだ「砂嵐」をモチーフに、ピクセルが躍動するムービングタイトルでRAN TVを表現しました。



-noise- Adam Chromak

● Misa Naraoka 《RAN TV》

こちらの映像は、六本木アートナイトプロジェクト公式サイトを見た際に、モノクロ感、そしてサイバー感のある雰囲気を感じたために、全体的に近未来的な演出を意識して制作しました。映像の最後、機械の基盤をモチーフにした模様が浮かび上がるところが特に見所です。映像に使用している曲も、自ら作曲したものとなっています。



@namo_m03

● 長岡 岳大 《球の集合》

黒いピンポン球で文字を作りドライバーで吹き飛ばした映像を逆再生したものです。球が吐息でも動いてしまうので、暖房を止め、寒さでぶるぶる震えつつ息を止めながら文字を配置しました。



長岡 岳大

● to R mansion 《森の牛さん》

世界で活躍するパフォーマンスカンパニーto R mansionが、俳優・ダンサーとして活躍する江戸川じゅん兵を迎えて製作。美術家作のオリジナル巨大パペットが登場。手持ちカメラで森の中を疾走するダイナミックな映像で、リアルかつ、ユーモラスでファンタジー溢れる世界観を表現しています。



to R mansion

● ん ちぐやま 《いろいろとまと》

ん ちぐやまの映像製作は全て1人で行っており、野菜や果物、身の回り品を題材とし、コマ撮りアニメを駆使して素材そのものの特性・特徴を強調します。また、パントマイムをベースとしたパフォーマンス活動を行っており、2014年夏にはロンドンやパリ、エジンバラなどヨーロッパで武者修行を敢行し、国内ではイベントや映像に出演して来ました。パフォーマンスも映像作品も一貫してノンバーバルかつユニバーサルな内容を念頭に創作活動を展開し続けています。



六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクト 開催概要

■正式名称：六本木アートナイト スピンオフ・プロジェクト

■六本木アートナイト開催趣旨：

「六本木アートナイト」は、生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルの提案と、大都市東京における街づくりの先駆的なモデル創出を目的に開催する、一夜限りのアートの饗宴です。様々な商業施設や文化施設が集積する六本木を舞台に、現代アート、デザイン、音楽、映像、パフォーマンス等の多様な作品を街なかに点在させ、非日常的な一夜限りの体験をつくり出す本イベントは、東京を代表するアートの祭典として2009年3月にスタートし、年々発展を続けております。 ※2011年は東日本大震災、2020年はコロナ禍により中止

■開催期間：2021（令和3）年2月27日（土）～3月21日（日）

■開催場所：YouTube チャンネル『RAN TV』 <https://www.youtube.com/channel/UCFiRs1izR5RlpKlBcdqD43w>

■視聴料：無料

■主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、港区、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合（五十音順）】

■助成：令和2年度文化庁国際文化芸術発信拠点形成事業

ウェブサイト：<https://www.roppongiartnight.com/> ※2月27日公開予定

Facebook：<https://www.facebook.com/RoppongiArtNight/>

Twitter：https://twitter.com/r_artnight

Instagram：https://www.instagram.com/roppongi_art_night_official/

※実施内容等に変更が生じる場合はウェブサイトやSNS等で改めてお知らせいたします。

報道関係のお問い合わせ 六本木アートナイト実行委員会 広報プロモーション事務局 (PR01.内)

担当：三上・小谷 TEL：03-5774-1420 / Mail：RAN@one-o.com